

よびごえ

VOL, 135

因速寺機関誌



NHKの朝ドラ「らんまん」で植物学者・牧野富太郎博士の自叙伝をやっている。高知県の造り酒屋の跡取りとして生まれたが、幼い頃から草花に魅入られ、東京へ進出する。幕末から明治、大正、昭和と生きられた。いろいろあって、自由民権運動とも接点をもつ。「名もなき雑草のような民衆が、いまこそ立ち上がるときだ!」と演説した弁士に対して、即座に、「違う!」と声を上げてしまい、弁明を求められる。そこで牧野は、「雑草という名前の草はない、どんな草花にも名前があるんだ」と力説し、活動家を唸らせる。この「雑草」という名前の草はない」という言葉は昭和天皇の言葉として有名だが、もとは牧野の言葉だったそう。私は、それを聞いていて確かにそうだと思った半面、それも「違う」と思ってしまった。何故なら、本当は、草花には名前がないからだ。「私は百合です」とか、「私はバラです」と名乗った花に出会ったことがない。つまり、どんな名前の草花でも、それは人間が命名した「仮名」に過ぎない。植物に本当の名前はない。名前はないのに、それに人間が勝手に、人間の目線で植物に命名するのは、傲慢なことではないか。命名とは、植物にとって大変失礼なことをしているのだ。草花は、その罪を許すだろうか。

言葉は

感情的で、

残酷で、

ときに無力だ。

それでも

私たちは信じている、

言葉のチカラを。

■ジャーナリスト宣言■

ここに掲げた言葉は、二〇〇六年に朝日新聞社が創刊一二七周年を記念して始めたキャンペーンのコピー（言葉）である。ところが記者の記事盗用という不祥事が発覚し、この「ジャーナリスト宣言」を取り下げてしまった。確かに、自分たちの意気込みを示したコピーなのに、それを踏みにじってしまったのだから、自粛するのも理解できる。

ただ私は以前から、このコピーは、誰が言ったかに関わらず、言葉に関わる人間たちに勇気を与えるものだと思ってきた。言葉の無力さも、残酷さも、十分に言い当てられている。人生を振り返ってみれば、言葉の残酷さに傷つかなかったひとはいないはずだ。また意見の違いや、情のもつれから、つい感情的になっしまい、そのことで嫌な思いをし、後悔しなかったひともないはずである。このコピーは、言葉の持っている否定的な面を、ちゃん

武田 釋定光（住職） しやくじようこう

と捉えている。

しかし、それで終わらない。「それでも私たちは信じている」と言っている。何を信じているのか。それは「言葉のチカラ」をだ。昔から「ペン」は剣よりも強し」と言い伝えられてきた。まあこんな言葉が生まれてこなければならぬほどに、「ペン」は剣よりも弱かった」のだ。「ペン」は「剣」の前に、どれほどの挫折の涙を流してきたことか。それであっても、「ペン」は言葉を弾丸に変えて撃ち続けてきたのだらう。

親鸞聖人は、主著である『教行信証』の末尾に、「連続無窮しんらんしやうにんにして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり」と記している。これは、仏法の伝承を願った言葉だが、この「連続無窮」という言葉が、どこまでも、絶えることなく、仏法を〈言葉〉として表現し続けろと聞こえてくる。やはり、我々は「言葉によって迷い、言葉によって救われる」存在なのだ。

■〈ほんとう〉の言葉が欲しい

現代は「情報化社会」だと言われている。日々、我々は種々雑多な情報の洪水に身をさらされている。自分では、それほど欲しくもないものののに、メディアから流れてくる情報に踊らされ、ついつい引きずられていく。この地区は、毎週水曜日に古新聞や雑誌や段ボールを回収する決まりになっている。新聞の束をぶら下げて収集場所に行って驚いた。他の家から、新聞の束が捨てられていないのだ。それで考えた。おそらく、他の家々では新聞を取るという習慣がなくなったのだらう。だから収集日には、うちの新聞しか捨てられていないのだ。ということは、新聞を読まな

いということが、最近では常態化しているようだ。活字離れと聞いているが、それを実感させられた。

しかし、それは違っても聞かされた。新聞は読まないけれども、ネットやテレビで情報を得ているから、もはや新聞は読む必要がなくなったのだそうだ。

だから、活字離れはしてはいないそうだ。ただ、それは表層的な情報の氾濫であり、自分自身に迫ってくる言葉ではないのだろう。そう思うと、やはり人間は、タマシイに響く、「へほんとう」の言葉」を欲しているのではないかと思われる。

■「自分」ほど恐ろしいものはない

親鸞の言葉は、当たり前前に過ごしている日常を、削岩機で掘り進み、やがて解体するチカラを持っている。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」(『歎異抄』第三条)などという言葉は、我々が、ボーッと生きている日常を、大きく揺さぶる。「善人が阿弥陀様の浄土へ往生できるのであれば、悪人はなおさらのことである」と。「善人」が往生できるのであれば、何とも思わないが、「悪人」が往生するとはどういうことかと、文句も言いたくなる。この劇薬のような言葉は、我々の「日常」を揺さぶり、混乱を引き起こす。

我々は、自分を「善人」の立場に置いているから混乱するのだ。そして弁明し始める。「私は悪人などではありませんよ、何も悪いことはしていない。警察に捕まるようなことは一つもしていませんよ」と。阿弥陀さんは、弁明をする「善人」に向かって、「お前は、へほんとう」に悪いことはしていないのか」と問うてくる。ちやうど、イエスが姦淫を犯した女の罪を裁こうとする聴

衆に向かったときと同じだ。イエスは「あなたがたの中で罪をおかしたことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」(ルカ書八)と言った。すると、どうだろう、聴衆は「年長者から始まって、一人また一人と立ち去って行つた」という。「年長者」とは、たくさんさんの罪を内面に犯し、それを溜め込んできたひとだ。

だから彼女と同罪だと感じ、裁きの中から離れていった。これが「悪人の自覚」というものだろう。

しかし、阿弥陀さんは、居たたまれず、この場から去って行つた「悪人」のためにこそ救いを誓われる。「善人」ではなく、「悪人」という自覚をもったものをこそだ。「罪」というものも、自分で犯そうと思つて作る罪は浅い罪だ。自分では気づかないで犯す罪こそが重たいのだ。そして、ほとんどの罪は、自分では気づかずに犯している罪なのだ。罪を犯したと分かるのは、いつでも罪を犯した後からだからだ。こうなると、「自分」ほど恐ろしいものはこの世にいない。

■一切衆生の大地としての自己

明恵上人が右耳を切り、全身を投げ捨ててまで、仏前に供養しようとした思いも分かるような気がする。本当は、「自分」は生きていてはいけない存在なのだ。しかし、この「自分」こそが、「善いことも悪いことも すべて阿弥陀さんのせい」と言いうる「自分」だ。つまり、「自己評価」をするところが解体された自己となった。いままで自分を評価して「善人・悪人」と考えていた思いの傲慢さに気づいたのだ。そして「一切衆生の大地」に溶けた。この大いなる大地こそが、「本当の自分」だった。皮膚で包まれた内側だけが、「自己」ではなかったのだ。

幻想ノート——幸福論——

平原行人（東京都狛江市）

掲載機会に感謝し、現在の私の「幻想」をお送りします。本籍
Ⅱ キリスト教プロテスタントの日本福音ルーテル教会（21
歳に洗礼を受け、教職ではない）になります。

幻想の出発は、まず悪の造形（捉えること）です。悪のイメージは…大雑把に…【悪Ⅱ悪魔Ⅱ実行部隊が実現（システム構築や詭弁など）Ⅱ見えやすい現れは、カルトなどの形態】でいいと思います。キリスト教文化の描写では、悪（魔）の目的は人類殲滅（じんるいせんめつ）ではなく「大人しくしていれば（便利な存在でいてくれれば）、どうでもよい」でしょう。「人間牧場」にしておけばよいのです。そして、悪が人を封印しシステム化した世を五濁悪世とします。すると、五濁悪世が解消し、人への封印が解ければ、人は本来の能力を回復することになります。

悪に対する制御機構が働き、悲惨な報道は全て（闇の悪側ではなく）光側主催の茶番劇になり果てています。さもないければ…（私は社会の事情も研究し、裏情報が入りますが）裏状況が深刻すぎ、とうに人は滅亡しています。が、五濁悪世（ごじよくあくせ）の解消は、偶然知る立場の者のみ知る話に過ぎません。

私の関心は、「その後に人はどうなるのか？」でした。つまり阿弥陀様の第十九願が実現したら、新約聖書の「千年王国」が到来したら、どうなるか？恒久平和・貧困飢餓疾病の消滅・古代超技術の復活…恵まれすぎて、人の風俗風紀は怠惰墮落醜惡の道をたどるのか？

私の強い確信は、「人は敬虔（けいけん）に回復していく」「第十八願（真の救済・浄土）に向かう」でした。真の救済は、「人の本来の力の回復」で、阿弥陀様の第十八願の気がしてなりません。

「幻想」を繋げます。人は、敬虔（けいけん）さと悪（魔）を悪む心を回復し、「被害がない」状態に回復します。私は、ほぼ怖れが基盤で、種々の怒り憎しみを抱くようです。それで、「ただ仁者のみ能く人を好み、能く人を悪む」（論語 里仁3）の「悪む」の、義憤の意を感じる表現に、憧れます。「被害がない」とは、いま食品・薬品は毒で溢れています。食材に注意し被害を訴えずとも、体内に解毒力があれば全く気にしない、というイメージです。

そして、「悪を悪むⅡ封印されるのを拒む」心は、「湧いてくる」自発の（spontaneous）力で回復すると思います。急にやる気が湧いてきたり、食欲が回復して来たり、等々、自発の喜び…：思えば、畏ろしく美しい神秘で、神仏とふと繋がる時に感じられる類です。自律的で、神の御業（みわざ）、阿弥陀様の働き、と感じられます。比べれば、「超常能力」は本来の通常能力で、文化遺産級の天然美などは造成可能かもしれません。思うに、「作り込み」だけでない「ライブ」であるご法話や講座も、例え骨格の知識情報が誤りとしても、多次元的に躍動していく「湧いてくる」作品

です。

家族との良好な関係が幸福の一例とすれば、神仏と自分との関係が信仰信心であり「敬虔」、でしょう。この究極の家族の愛の実感が、生きる全てかもしれません。

「我らに罪を犯す者を我らが赦す如く、我らの罪をも赦し給え」(マタイ6:12)と教会で祈る時、復讐心への戒めと私は受け取れず、「家族」の愛があるから、そこは考えなくていいよ、と聞こえます。乱暴なイメージながら、損害を一千万円被ったら、奪回や訴訟に生きるのではなく、保険が二千万下りるから、美味しいものを食べに行こうよ、と。(旧約聖書「ヨブ記」では、失った者に神が倍に報います)

一方、「悪を悪む」力は、高度な働きが壊れ暴走すると、「何でも一緒くた」の世界に自身が封印され、たやすく厄介な悪や害になります。鍛錬された正義観の米国では、正義の強行者は、映画で悩み多き影の存在で、蜘蛛だのコウモリだのと呼ばれ、勘違い自警団として糾弾されたりします。自責・復讐・ジャッジ(品定め)も、見当違いの悪み方です。

幻想繋ぎの続きです。自然な顧慮でなく、自責は、自分が原因と正見していない。敵を見失う・取り違えることです。そもそも「自責癖」自己へ責任転嫁」で、詭弁を弄し無関係な方面を責めます。くれぐれも、「五濁悪世を作り出す悪は存在する」の発想が必須です。さもないと、悪は悪むべき↓しかし悪を見定められない↓悪を悪むのが困難↓人は自責に封じ込められる、

に陥ります。

この脈絡から、悪による人類封印のための仕業と考えると、「生来の悪・罪」は、詭弁です。莫大な手間暇かけて人類を幽閉するより、自分から出ないように騙すのが一番楽だからです。曰く「心に悪が棲む」「(善をしながらも)悪を行ってしまう」「環境破壊・戦争などの愚行」「(悪の)カルマ」「煩惱の悲しき性」。人ゆえに悔い・顧慮があります。が、落ちのない落語のような罪悪カルマ煩惱の類の論は、全く心がときめきません。キリスト教文学最高峰、ドストエフスキーのロシア正教には、例外的に原罪概念がないといえます。

さらに繋げて、復讐心という封印。力の回復がない今は、悪・真の魂の損害・相手の罪・復讐心の対象―これらを、そもそも捉える力がまだない。復讐心の対象を表す単語がなく、損害・被害・加害、どれもしくりこない。隠蔽に加えて、元来、人と悪とが「関係がない」。

私自身の体験でも、自分を嗤う仇に対し、損害を訴えるほど惨めな事はありません。神仏から「保険」が下りるまで、やり過ぎるかも実際大事です。

復讐という番組を堪能し浸る―それで癒える事もあり、疲れ果て浸れない事もあります。が、幻想の結びは、必ずの「回復」。封印は過去になり、封印されても、自在に番組やチャンネルが変えられる力の「回復」「復活」。

幻想にお付き合い下さり感謝です。現実世界の「ネタばらし」としての映画作品などは、内容がもっと凄いのですが。

■ご多忙の中、平原さんにはお手数をお掛け致しました。一読し

て、「村上春樹」の世界を感じました。それは「パラレル・ワールド」と呼ばれています。現実の生活を描写しているように見えて、架空だったり、架空を描写しているように見えて現実だったりします。まあこれは私たちが、普段、感じていることを顕微鏡で拡大した時のような幻惑感をもたらします。私たちは、大地から、1メートル以上、上空からすべてを見渡しています。しかし、大地から数センチのところから見ると、蟻や草花はどう見えるでしょうか。蟻の触覚の動き、歩配の正確さ、仲間同士の無駄のないコミュニケーション力、見事な子どもの養育力、そのどれを取っても人間を超えているように思えます。朝ドラの牧野富太郎博士は、よく大地にひれ伏して植物を観察します。1メートル以上の上空から、一気に地上、数センチにまで視線を降下します。この「降下」を経て、ようやく大地の生き物に出会うのです。私はここに「懺悔」を感じます。いままで地上1メートル以上の上空にいたときには、決して見えなかったものと、地上数センチのところではじめて出会うのです。地上1メートルで見えていた世界は、見えていたと思っている人間の傲慢です。それへの懺悔が、「降下」によって初めて生まれます。牧野富太郎博士は、「雑草という名前の草はない」と言われました。さらに「ひとは植物なしには生きられないが、植物はひとがいなくても生きていける。植物のほうが人間より優れているのだから、ひとは植物に頭をさげなければいけない」と言われたそうです。人間は植物の「多様性」に学ぶべきでしょう。人間の「善」と「悪」は、重層的に混在します。やはり「一悪を以て衆善忘れず」（帝範）です。一つ悪いところがあるからといって、他の多くの善を忘れてはならないと。

住職

こころの拠り所

釋尼永劫（東京都新宿区）

(1)

四月二十三日「ご命日の集い」へ出向いた。コロナ禍になって約三年ぶりの出席である。東大島駅を出ると、左手に真っ白な花がみえた。ナンジャモンジャの花だ。満開のナンジャモンジャの並木道を通り、因速寺さんへと電動車イスを走らせる。

東砂辺りに来た時、実家へ行くような心持ちに、ふと、法名を授かった日の心境を思い出した。

砂町は生まれ故郷よ燕の子

拙句の燕の子は、帰る故郷がある仕合わせに涙した。このところ、とんでもない出来事が続いていた。体力も気力も一杯一杯。言語化して、このモヤモヤを吐き出したい。少しでも不安を減らしたかった。

(2)

因速寺さんは、いつもの笑顔で迎えて下さった。休憩室では、淹れ立ての温かいお茶を頂き、心地がつく。

そこへ、ご住職さんが入っていらした。透かさず私は、「お訊きたいことがあります。よろしいでしょうか」と、なかば強引に時間を頂いた。持参した広辞苑の電子辞書を開き、次の文言の教えを請う。

【慣】「餓鬼に芋殻」【解】「鬼に金棒」の反対で、頼りにも力

にもならないことのたとえ。浮世風呂(3)「あれで愛嬌がありやア鬼に金棒さ」『—とはおいらがこつたらう』」

「浮世風呂」を図書館から借りてきて読んだ。だが、『あれで愛嬌がありやア鬼に金棒さ』の件が解らない。

ご住職さんは、「うーん。浮世風呂の引用だから、読んでみないと、なんとも解らないなあ」。不躰な質問にも拘わらず、丁寧に対応して下さった。有り難さと同時に、なぜかほつとしました。

(3)

ご法話の中の一つに芥川龍之介の小説「蜘蛛の糸」のお話をされた。「蜘蛛の糸」は、小学生の頃に学芸会の劇で観たことがある。悪人が助かる寸前のところで糸が切られた。再び地獄へ堕ちていく様にドキドキしたり。人に意地悪してはダメなんだ。と、子どもなりに「戒め」のようなものを感じた。

ところが、ご法話では、「糸が切れることによつて彼は助かったのではないか」と、さらに「極楽浄土とは、犍陀多が堕ちていった地獄の底にあったのだ」と説かれる。

ご住職さん執筆の「蜘蛛の糸」の法話が掲載されている。「よびごえ」及び「名古屋御坊の四月号」の巻頭言・『ただ念仏のみぞまこと』を繰り返し拝読させて頂きました。

主人公の悪人・犍陀多は、今の私と同じではないか。こころの安定をと、もがき、自分の意に染まない事をなんとかしたい。そんな思いにしがみついていたのだ。

(4)

さらに、ご法話では、動物のすばらしさのお話もされた。動物の賢さについては、実感する事がある。特にゴリラからは、「言

葉」について、考えさせられることが多い。

上京したての頃、上野動物園へ毎週通った。三ヶ月経ったある日、一頭の雄ゴリラが私に近寄って来た。いつもは背中を丸め、寂しそうなゴリラだった。名はビンドン。ガラス越しとはいえ、間近に観るゴリラの大きさには驚いた。

ある朝のこと、立ったままガラス窓にへばりつくビンドンの姿が。(足の不自由な私は、さっさと歩けない)その窓へ、次々と観客が押し寄せる。私たちは会えなかった。

その次からは、ガラス窓に着く私を待ってから、ビンドンは近くに来るようになった。ガラス越しに、ひたすら見つめ合う。ビンドンの気が済むまで。

(5)

そして一年後、ビンドンは博多の動物園へ移された。父親のアルビノが原因か、ビンドンには繁殖力がない。博多では、群れでなく単独で居るという。

五年後、私は、博多へ、ビンドンを訪ねた。朝、放餌場に出てきたビンドンの名を呼んだ。一瞬、首を傾げたが、すぐに気づいたらしい。放餌場を嬉しそうに走り廻り、ついにはプールへダイブした。

飼育員さんが私の所へ来て、「今朝のビンドンは驚くほど元気です。彼とお知り合いですか」と訊かれた。博多での様子を説明して下さり、ビンドンが表紙のノートまで頂いた。

(6)

こんなにも感性豊かなゴリラが、檻の中にいる。ビンドンが不憫に思えた。だが、ひよつとしたら、目にこそ見えないが、檻の

中に居るのは、人間の私の方かも知れない。

【人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらに、いずれの生においてかこの身を度せん。】

お蔭さまで今日は聞法させて頂けた。仏法をお聴かせ下さる因速寺さんの在ることに、改めて感謝、感謝です。

「ご命日の集い」を終えて、因速寺さんを出る。東大島駅へ行く途中。道端には、小さな薄紅色のユウゲシヨウの花がゆらゆらと風にゆれていた。

■ゴリラの話は以前お聞きしていたが、もはや人間以上のお付き合いだっただけですね。ネットでビンドン調べてみたら、二〇一六年に亡くなられていました。ご愁傷様です。人間の都合で、アフリカから連れて来られ、動物園という檻の中で一生を終えられた。そこに人間の罪深さを感じます。ゴリラを見るためには、彼らの住んでいるところへ会いに行くべきでしょうね。それにしても、彼が檻の中にいるのか、彼から見たら、人間こそが檻の中にいるのではないか、という逆観にはハッとさせられました。人間は誰も檻の中にいるとは思わなければならない、〈ほんとう〉は、自分の「思い」という檻に閉じ込められているのでしょうか。見える檻は壊せても、見えない檻は壊すのが難しいです。それから、「餓鬼がきに芋おがら殻」の話ですが、餓鬼は飢えて力のない者で、それが「芋おがら殻」(アサの皮をはいだ茎)を持ったところで、何の力にもならないこととの例えだそうです。真宗以外では「芋おがら殻」をお盆の迎え火に焚きますね。最初「芋おがら殻」を「芋おがら殻」と勘違いしていました。まあ「芋おがら殻」でも、通じないこともないかも知れませんが。住職

因速寺 創建四百年

記念法要のお知らせ

因速寺は、江戸時代の初め、元和九年(一六二三年)に、江戸・京橋竹町に創建されました。その後、八丁堀材木町へ移転します。ここで明暦の大火に遭い、大川(隅田川)を渡り、深川黒江町(永代二丁目)に移転します。この地で三八〇年間、営まれておりましたが、大正十二年の関東大震災により、昭和二年(一九二七年)、三度目の移転をし、現在の地に到っております。

一口に「四百年」と言いますが、今日まで因速寺を支えてこられた、寺院関係者並びに御門徒の皆様の方には、今更ながら驚かされます。私が「第十三代住職」ですので、単純に父母(二人)、祖父母(四人)、曾祖父母(八人)と計算していくと、四〇九六人の先祖が関わっていたことになります。

本尊の阿弥陀如来は、鎌倉期に仏師・快慶の工房で製作されたもので、約八〇〇年間、奉安され続けております。

この秋に、創建四百年を期して、記念法要(報恩講を兼ねる)を計画しておりますので、ここにお知らせ申し上げます。(詳細内容は期日が近くなりましたらお知らせ致します)

法要勤修日 二〇二三(令和五)年十月二十九日(日)

★因速寺 掲示板★

新盆合同法要 兼ご命日の集い

7月9日(日)午後2時～(受付午後1時)

冥加志お一人三千円(高校生以下無料、一家族五名まで)

『ご命日の集い』参加の方は五百円

この一年にお身内を亡くされた方々を追悼し自分自身の人生を振り返るご縁にしていただければ幸いです。お釈迦様は、ひとは病や事故や加齢で亡くなるのではなく、「誕生」が死の根本原因だとおっしゃいます。今回のご縁に仏法に耳を傾け、共に救われていきましょつ。

門徒・檀家である無し不問です

◆写経の会◆

門徒・檀家である無し不問です

毎月1回 午後1時30分～4時頃まで(お勤め+座談含む)
開催日.. 7月5日(水) 8月はお休み

9月6日(水) 10月4日(水)

教材.. 正信偈、仏説阿弥陀経、仏説無量寿経(上下巻)

一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行(おつとめ)をします。お菓子とお茶を飲みながら車座になり座談をする会です。写経のみの参加でも構いません。非日常を味わってみませんか? どなたでも参加可能です。

冥加志.. 初回は三千円(教材費込)

二回目以降五百円

佛説無量寿経巻下ノ一

◇フッディ・サロン◇

〔輪読会〕

一冊の本をみんなで輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら語らう会です。参加される皆さんは職種も様々、住所も様々、なにも強制されることはありません。様々な本を通してそこに流れているへほんとうくに触れるのが会の趣旨です。どうぞご参加下さい。どなたでも参加可能です。

● 下半期の開催日 午後四時スタート

● 冥加志.. お一人千円 ※遅刻・早退自由です♪

● 日程.. 6月25日(日) 7月30日(日)

8月27日(日) 9月18日(月祝)

門徒・檀家である無し不問です



◇ご命日の集い◇

門徒・檀家である無し不問です

毎月のご命日のかたを縁として仏法を聴聞する集いです。やがて私自身も、この世を去っていきます。

みすみす死ぬのになぜ生きるのか?

人間の根源的な問いに、あなたならどう答えますか?

開催日.. 7月9日(日) 兼新盆合同法要午後2時～

10月29日(日) 兼報恩講 午前11時～

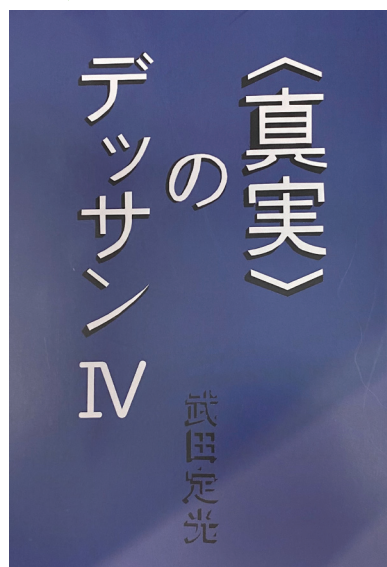
内容.. 読経(焼香)+法話(住職)

冥加志.. 冥加志は各会で異なりますので詳細は後日



New!

住職新刊本発売



＜真実＞のデッサンⅣ
実費冥加金 500円

お釈迦様や親鸞が「ハ真実」のフォルムを完成

させたわけではない。彼らも、私と同じ、発展途上の求道者だ。彼らの言葉を参考にしながら、自分自身の「ハ真実」のフォルムを完成させていかなければならない。そのような思いの中から、飽きずに、『ハ真実のデッサンⅣ』を出版することにした。日々の出来事は、雑多であるが、そこに展開している法性の瑞々しさは汲み尽くすことはできない。そして、いつも思うことだが、これらの言葉の羅列が、「ハ真実」のフォルム」の一端にでも触れていれば、これほど幸いなことはない。人間は「自利」だけでは決して満足しない。「自利」と「他利」がたさなければ、ほんとうの満足はないものだと思うっている。

〈因速寺護法会費のご報告〉

令和四年度決算

総収入	17,630,168円
(前年度繰り越し金を含む)	
総支出	12,762,413円
次年度へ繰り越し	4,867,755円

令和五年四月一日現在

※詳細をご希望の方は、寺務所にお尋ね下さい。

雑言雑語

四月の三日～八日まで本山の親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年の法要に准堂衆として出仕してきた。五十年に一度なので次の法要を迎える時は八十九歳になる。恐らくもうこの世には居ないだろう。一生に一度の法要に遇える機会などそうそうない。いざ当日を迎えると朝七時から出仕だった。やはり本山の両堂の大きさに圧倒される。私は阿彌陀堂に座ると何故か涙がでる。止めようもないほど溢れ出るのだ。しかし御影堂に座った時は涙は出ない。むしろ哀れというか申し訳ない気持ちになるのだ。今回もそうだった。この大きな法要を、覧になつて親鸞聖人は慶ばれているのだろうか、そんなことを思いながら親鸞聖人の御真影の前に座っていた。法要も大詰め、八日の第一期結願法要になり、庭儀参道列が行われた。当日は晴れていたのに、菊門から出て丁度御影堂の所辺りで大雨になった。「何とか無事に終わってくれ」と願っていたのだが、「プチ」と音がしたと思ったら、差貫（袴）の紐が切れ、裾が伸びて、まるで代官様のような感じになってしまった。なんとか裾を手繰り上げて、阿彌陀堂から退出して急いで控室にいつて裾を直した。先輩から「これ使うか？」と安全ピンを頂き事なきを得た。法要に来て頂いた門徒さんにも感謝申し上げます。 釋定志

表紙画題

『紫陽花』

武田美輪（坊守）



『よびこえ』 一三五号

発行所 因速寺（真宗大谷派 本山 東本願寺）

〒136-0074 東京都江東区東砂1の4の10

TEL (03) 3644-0986 FAX (03) 3648-4391

Email info@insokuji.com

HP https://insokuji.com

編集・発行 武田 定光 Takeda Jyunko

発行日 二〇二三（令和五）年六月二十七日

Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan